

SRM学会 関東部会をオンライン開催

激甚災害対応などのテーマで研究報告

ソーシャル・リスクマネジメント学会(上田和勇理事長)は12月4日、関東部会を開催した。名古屋短期大学の小柳雅子氏が「激甚災害時における私立大学の避難場所としての役割について」、浅津中小企業診断士・社労士事務所の浅津光孝氏が「イノベーションとポスト論理思考」と題し、それぞれ研究報告を行った。その後、上田和勇氏による「私のリスクマネジメント研究の変遷」と題する講演が行われた。当日は、オンライン経由で50人、会場で6人が参加した。

中居芳紀関東部会担当の研究報告が行われた。常務理事の「歓迎の言葉」、上田理事長の開会辞に続き、研究報告に移る前の時間を利用して、上田氏の古希を祝して記念論文集「復元力と幸福経営を生むリスクマネジメント」の献呈式が行われた。編集代表・戸出正夫会長の司会のもと高野仁一理事による祝いの言葉と論文集の献呈の後、編集代表・亀井克之理事が海外研修先のパリから祝辞を述べ、最後に上田理事長のあいさつで献呈式を終了した。

その後、亀井弘明副理事長の司会により、2件の研究報告が行われた。名古屋短期大学の小柳雅子氏は「激甚災害時における私立大学の避難場所としての役割について」と題し、避難場所に関する基本的な法制度を踏まえつつ、私立大学を避難場所として運営する際の留意点についてその詳細を報告した。次に、最近の災害の激甚化と日常化を踏まえ、「スピーディーなフラッシュアップが求められているにも関わらず、現実がなかなかそれに追いついていない」と指摘。自身の勤務する私立大学において、



亀井氏



上田氏



浅津氏



小柳氏



上田理事長に古希記念論文集を献呈

味)の波が、従来型の顧客ニーズを起点とした規模の経済がもたらす効果を低下させていると主張した。

その上で、それに代わるこれからの市場創造の担い手としてのアート思考(アーティストのような「自分軸」で創造的なアイデアを生み出すこと)の可能性について明示した。特に、そのアート思考実践の先駆者として、米国の大手化学メーカーである3M社の事例を取り上げた。同社における部下の自主性を尊重する文化、さらにそれによる心理的安全性を伴い展開される、個人の自由な創作活動を起点とする偶発性を伴ったイノベーションの将来性について、哲学者ヘーゲルが掲

げた「自由と相互承認の精神」との関係性にも言及しながら、独創的な理論を展開した。

休憩の後、上田氏による「私のリスクマネジメント研究の変遷」と題する講演が行われた。上田氏は自身のこれまでの主張や考え方に続き、次のように要約した。

リスクの現代的定義としては、リスクマネジメント(RM)は単に損失の管理だけではなく、潜在的な好機の実現化のプロセスであるとし、RMにおけるソフト・コントロールの重要性に注目。企業倫理リスクはまさにソーシャル・リスクであり、このマネジメントをソフト・コントロールの視点から捉え直し、その結果、企業のリ

スクマネジメントを逆境的な復元力(レジリエンス)を高めること、柔軟思考の必要性を説き、それに加えて背中

ス」という視点から、レジリエンス経営の源泉を分析するとともに、ビジネス・プロセスを提唱し、企業健康経営や幸福の醸成に関する分析と健康経営リスクマネジメントプロセスを提唱している。

次に、RMプロセスに沿って、重要なRM思考をミクロ的かつ事例を用いて検討し、リスクと危機に強く、かつ社員の幸福感を醸成できるプロセスの提示、レジリエンス経営から幸福経営の実践に役立つRMプロセスの提唱を行った。

断士・社労士事務所の浅津光孝氏が「イノベーションとポスト論理思考」と題し、研究報告を行った。浅津氏は、論理的思

考偏重による経営戦略のコモディティ化および環境変化としてのVUCA(V=不安定、U=不確実、C=複雑、A=曖昧)

「自由と相互承認の精神」との関係性にも言及しながら、独創的な理論を展開した。

休憩の後、上田氏による「私のリスクマネジメント研究の変遷」と題する講演が行われた。上田氏は自身のこれまでの主張や考え方に続き、次のように要約した。

次に、RMプロセスに沿って、重要なRM思考をミクロ的かつ事例を用いて検討し、リスクと危機に強く、かつ社員の幸福感を醸成できるプロセスの提示、レジリエンス経営から幸福経営の実践に役立つRMプロセスの提唱を行った。

最後に、江尻行男副理事長が閉会の辞を述べ、本年度の関東部会を終えた。

上田理事長の古希記念論文集献呈式も

津中小企業診断

スクマネジメントを逆境的な復元力(レジリエンス)を高めること、柔軟思考の必要性を説き、それに加えて背中

homai web
 保険毎日新聞社のホームページ
 スマホはこちらのQRコードから